

「まくらが」から「詩群」へ 古河における詩文学の発展

昭和27年（1952）初春の夕べ、横山町通りで、3人の若者が、西風に吹かれながら立話をしていました。「古河地方の同好の士を集めて、短歌を中心とした雑誌を発行しよう」と、相談がまとまりました。こうして誕生した雑誌が「まくらが」です。

中核となった3人とは、松本久（静泉）、立石和正、田村泰一の各氏で、かれらは、興野蔵、村西弘安、大高澄子、中村智英、新井綾子、榎本文弥、大塚満、渡辺昭一といった人々と「まくらが短歌会」を組織、毎月の歌会を催しました。

「まくらが」は途中2年間のブランクを挟みながら第6集まで発行されますが、ここで解散に至ります。

とはいえ、これは発展的解散であり、誌名を

「詩群」とあらためて再出発します。この間の推移について、「詩群」の巻頭の言葉を引用してみましょう。

「たまたま偶々、第六号編集するに当って、新入会員の参加が多方面にわたっていたため、詩、短歌、俳句を含めた詩文学誌として新たなる意欲の下に発行された。（中略）このようなわけで第七号を発行するに至って、我々まくらが詩人群に誌名を改め

るべき気運が起ったのは当然のことであった。この結果として“詩群”は誕生した。（中略）詩、短歌、俳句をひっくるめての融合、芸術としての新しい国民詩の確立。この造型への広い“場”となることに“詩群”の狙いがおかれている」。

第6号に福田敬二氏が俳句「枯木抄」を携えて参加したのを皮切りに、以降「詩群」は詩、短歌、俳句等を融合した、まさに総合詩文学誌として出発したのでした。

昭和32年（1957）には古河市文化協会に加盟、同年暮れには、文協の文芸講演会で来河した、詩人・草野心平を囲んで旅館「ほうりゅう芳龍」において懇談会を開いています。写真はその懇談会のときのものです。

最盛期には約100名の同人を擁し、古河を核に各地

の同好の士を集めて地方文学の拠点となった「詩群」。毎回130～150部、合計で約5,000部を発行、また、詩群叢書として、同人の個人詩集を2冊、歌集2冊、句集1冊を発行して、昭和33年（1958）6月、第36号をもって終刊を迎えたのでした。

（企画展「古河の文芸 そのⅡ」は1/5～3/13まで開催）



草野心平を囲んでの「芳龍」における懇談会
左から草野心平、立石和正、福田敬二（写真提供：木下弘子氏）